

小学校外国語活動における MERRIER Approach を用いた授業づくり

M17EP003

内田 圭

1. 問題の所在と研究の目的

文部科学省(2014)は,学級担任等(外国語活動を担当する教師 3,203 人)を対象として,外国語活動に対する意識調査を行った。その結果,「英語が苦手である」という質問項目に対して,「そう思う」または「まあそう思う」と回答した教師の割合は全体の約 7 割を占めている(文部科学省 2014,p.18)。この調査の結果から,小学校において多くの教師が英語に苦手意識をもっていることが示される。

英語に苦手意識をもつ教師は,授業でどのように英語を使えばよいか分からず,使えない場面が多いと筆者は考える。文部科学省(2017)は,クラスルームイングリッシュについて,「指導者(日本人の教師)も英語を使うよいモデルとして,授業中の指示や質問にできるだけ英語を使うように努力したいものである(文部科学省 2017,p.118)」と記している。また,「新出の表現を用いるときは,何度か聞かせるとともに,動作を加えたり,絵をかいたりして児童の理解を助けるようにする(文部科学省 2017,p.118)」とも示されている。

では,児童の理解を助けるために,教師はどのように英語を使えばよいのであろうか。

渡邊・酒井・塩川・浦野(2003)は,教師が児童にわかりやすい英語を話していくための視点として, MERRIER Approach(メリアー・アプローチ)を紹介している。メリアー・アプローチとは,表 1 に示す 7 つの視点のイニシャルをとって,そのように呼ばれている。渡邊他(2003)によると,メリアー・アプローチは,「日本語話者教師が積極的に英語を用いて英語を教えることを基本として,そのための方針(渡邊他 2003,p.38)」を示している。つまり,英語に苦手意識をもつ教師が,メリアー・

アプローチを用いた指導を続けていくことで,授業で英語を使う際に留意する視点を明確にすることができる考える。

一方,渡邊他(2003)は,メリアー・アプローチを用いた指導を続けていくことで,児童は「英語を聞くことに抵抗感を示さず理解するようになる(渡邊他 2003,p.237)」という効果も指摘している。したがって,メリアー・アプローチを用いた指導を続けていくことによって,児童にとっては,教師が使う英語を理解できるようになるのではないかと考える。

以上,本研究では,小学校外国語活動においてメリアー・アプローチを用いた授業を実践し,その効果や課題を検討していく。具体的な目標は,以下の 2 つである。第 1 に,教師が授業で英語を使う際に留意する視点を明確にできるようになることであり,第 2 に,教師が使う英語を児童が理解できることを目標とする。

表 1 MERRIER Approach
(メリアー・アプローチ)

視点	内容
①Mime/model (モデル/マイム)	言語外情報を使うこと
②Example (イグザンプル)	具体例を挙げること
③Redundancy (リダンダンシー)	別の視点で言い換えること
④Repetition (レパティション)	重要なことは繰り返すこと
⑤Interaction (インタラクション)	児童とやりとりしながら進めること
⑥Expansion (イクспанション)	児童の発言を正しく繰り返すこと
⑦Reward (リワード)	児童の発言や行動を称賛すること

注: 酒井(2014)pp.18-19 をもとに筆者作成

・メリアー・アプローチとは

①Mime/model(言語外情報)とは、教師が身振りや表情を交え、実物や視聴覚機材、ジェスチャーなどを用いながら話すことであり、「授業を進める上で、最も大切なことは、英語を話すときに、ジェスチャーや絵を用いて、子どもの理解をうながすことである(渡邊他 2003,p.223)」とされている。

②Example(具体例)とは、「抽象的な表現を理解させるために、具体的な例を挙げながら児童の理解を深めていく(渡邊他 2003,p.11)」とされており、児童にとっては、教師の話す英語の意味を理解していくことにつながると考える。児童が学んでいない語彙や表現についても、具体例として既習の表現を用いて説明していき、児童が自分自身で気づいて理解していくことを筆者は目指した。

③Redundancy(言い換え)とは、「1つの事柄の意味を伝えたい時に様々な言語表現を用いたり、発想を変えたりして、理解をいっそう容易にする工夫をする(渡邊他 2003,p.13)」ことであり、特に活動間の指示をする場面で用いた。筆者は、指示をする際に、いくつかの表現を用いて、児童が教師の指示を理解しやすくなることを目指した。既習表現の少ない小学生にとっては、教師が1つの事柄を様々な表現で伝えることで、児童の理解につなげていけると考える。

④Repetition(繰り返し)とは、「必要と思われる表現や内容は、意図的に繰り返し使う(渡邊他 2003,p.15)」ことである。本実践では、主に第8時に行う活動で児童に発話させたい表現(表2:次のページに記載)を繰り返し使っていた。

⑤Interaction(やりとり)とは、「教師のみが話すのではなく、児童と相互交渉しながら話す(渡邊他 2003,p.15)」ことであり、「初めから英答を強要すると、情意フィルター(不安や自信のなさ、恥ずかしさ等)が高くなり英語の習得は遠のいてしまう(渡邊他 2003,p.15)」

とされている。したがって、まずは教師同士のやりとりを見せることや、難易度の低い発問を行っていくことを心掛けた。

⑥Expansion(正しく繰り返す)とは、「児童の不完全な発話に対して、目立った形の訂正は避け、何くわぬ顔で修正し、復唱する(渡邊他 2003,p.16)」ことである。本実践では、児童が誤答をした場面、日本語を発した場面において用いた。児童が発した日本語に対して教師が英語で反応することは、児童にとって英語の表現を聞く機会になるとともに、⑤Interaction(やりとり)につなげていく機会にもなると考えた。

⑦Reward(称賛)とは、「児童の反応に対しては、質のいかんに関わらず、何らかの肯定的な評価をする(渡邊他 2003,p.17)」ことであるとされている。称賛については、どのような教科においても共通して心掛けていきたい視点であると考えた。児童の反応に対して、筆者が肯定的な評価をしていき、児童が安心して学べる環境をつくっていくことを目指した。

2. 研究概要

(1)対象校 山梨県内の小学校

(小学校1年生から教科として英語が実施されている)

(2)時期 2018年10月～11月

(3)対象児童

第5学年児童(1組33名、2組34名)

(4)単元

『We Can! 1』のUnit6「I want to go to Italy.(8時間扱い)」の授業を実践した。児童は、今までの外国語活動において、生活体験に近いことを題材として扱ってきた。本単元においては広く世界に目を向けさせる。そして、児童が「どこの国であるか」を考えながら情報の聞き取りをしたり、「おすすめの国」を他者に伝えたり、あるいは自分が得た情報から、本当に行きたい国はどこかをその理由

とともに伝えられることを目指している。単元計画は表 2 のとおりである。

また、単元を通して教師が作成した HINT BOOK(13 か国の国ごとに「見られる物」「食べられる物」「買える物」が写真付きで載っているもの)を活用することで、児童に世界の国々について一定量の情報を与えた(図 1)。

表 2 単元計画の概要

時	●目標 言語材料
1	●世界の国の有名なものについて知ろう。 America, Australia, Brazil, Canada, China, Egypt, France, Germany, India, Italy, Peru, Russia, Thailand
2	●世界の国の名前や有名なものの言い方になれよう。 Where do you want to go?/I want to go to ~.
3	●見たいものについて、英語で伝えよう。 (Where do you want to go?/I want to go to ~.) I want to see~.
4	●食べたいものについて、英語で伝えよう。 (Where do you want to go?/I want to go to ~./ I want to see~.)I want to eat~.
5	●買いたいものについて、英語で伝えよう。 (Where do you want to go?/I want to go to ~./ I want to see~./I want to eat~.) I want to buy~.
6	●行きたい国を英語でおすすめする言い方になれよう。 (Where do you want to go?/I want to go to ~.) You can see ~./You can eat ~./You can buy ~.
7	●おすすめの国を英語でおすすめしよう。 (Where do you want to go?/I want to go to ~./You can see ~./You can eat ~./You can buy ~.)
8	●一緒に旅行に行く仲間を探そう。 (Where do you want to go?/I want to go to ~./You can see ~./You can eat ~./You can buy ~.)

注：筆者作成



図 1 HINT BOOK

注：筆者作成

(5)分析方法

分析方法としては、①授業者の見取り(ビデオでの分析)、②参観者の見取り、③児童の記述(振り返りシートをもとに)の3つの観点で行った。

振り返りシートについては、これまでの授業で児童が使ってきた振り返りシートに「わからなかったことや、もっとヒントがほしかったこと」の欄を加えたものを使用した(表 3)。児童の記述に対しては、必要に応じてインフォーマルな形でインタビューを行った。

表 3 振り返りシート

1	Today's goal	世界の国の有名なものについて知ろう。	
	①	めあてを達成することができた。	☀️ 😊 😊
	②	意欲的に授業に参加することができた。	☀️ 😊 😊
	③	英語の表現をたくさん聞いたり、言ったりできた。	☀️ 😊 😊
	④	英語の表現をたくさん読んだり、書いたりできた。	☀️ 😊 😊
できるようになったことや、わかったこと		わからなかったことや、もっとヒントがほしかったこと	

注：これまで児童が使ってきた振り返りシートをもとに筆者が作成

3. メリアー・アプローチを用いた授業づくり

メリアー・アプローチを用いた授業を実践する中で、筆者は7つの視点についてそれぞれの視点同士のつながりを強く感じた。特に、⑤Interaction(やりとり)を中心として、やりとりの中でそれぞれの視点を捉えていくことで、メリアー・アプローチの7つの視点をイメージし易くなると考え、図2のモデル図を作成し、このモデル図に基づき、授業実践した。

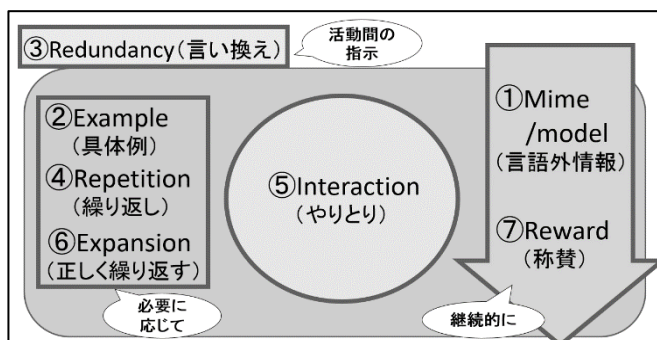


図2 メリアー・アプローチを用いた授業づくりのモデル図

注：筆者作成

具体的には、やりとりに向けて活動間の指示をする際に、③Redundancy(言い換え)を多く用いた。なぜならば、一つの事柄をいくつかの表現で伝えていくことで、指示の内容が児童に伝わりやすくなると考えたからである。また、やりとりの中で児童に英語の意味や表現を理解させるために、②Example(具体例)・④Repetition(繰り返し)・⑥Expansion(正しく繰り返す)を必要に応じて用いた。①Mime/model(言語外情報)・⑦Reward(称賛)については、授業の中で継続的に用いて、児童の理解を助けていくことや児童の不安や自信のなさを減らしていくことを目指した。⑤Interaction(やりとり)については、「やりとりをしないと行けない」ではなく、教師自身の「聞いてみたい」という気持ちを大切にしたい。また、英語を使う際に、教師が知らないこと

について問いかけていき、英語を使うことを目的としてではなく、手段として捉えていけるようにした。

以下の4点は、やりとりをする際に筆者が考えてきたことである。

(1)教師同士のやりとりから

教師と児童とのやりとりへ

どのようなやりとりにおいても、まずは教師同士(ALT との)のやりとりを見せたうえで、教師と児童とのやりとりをした。これにより、まずは児童にやりとりを聞く機会を与えた。その際に、言語外情報を用いて、児童の理解を助けていくことを目指した。また、初めは英答を求めない状況を作り、不安感を減らすことを目指した。児童とのやりとりにおいては、児童のどのような回答に対しても、称賛することを心掛けた。

(2)児童の発した日本語からやりとりへ

外国語活動の授業においては、児童が日本語を発する場面が多くある。ALT に比べると、日本人の教師は児童が発した日本語の意味を理解できる立場にあると思う。だからこそ、日本人の教師である筆者が、児童が発した日本語を英語で正しく繰り返し、児童に英語の表現を聞かせるとともに、その後の児童とのやりとりにつなげていくことを目指した。その際に、児童の反応に対しては必ず称賛していくことで、児童が教師の言葉に反応しやすい環境をつくっていった。

(3)既習事項を用いたやりとりから

新出事項を用いたやりとりへ

単元の前半においては、やりとりの中で、既習事項を用いた質問(本単元に関わる内容)を行った。その際に、児童とのやりとりに向けた導入の問いとして、まずは、児童が挙手(動き)もしくは Yes/No(短文)で答えられるような質問をした。その後に文章で答えるよ

うな質問をした。やりとりに向けた導入の問の難易度を下げること、児童の不安感を減らすことを目指した(図 3)。また、児童の回答に対しては、どんな場面においても必ず称賛をしていった。これにより、児童の不安感を減らすことや自信を持たせることを目指した。

挙手・Yes/No で答える質問

T1: ~先生. Do you like elephants?
T2: Yes,I do.
T1: How about you? **Do you like elephants?**
S: Yes,I do./No,I don't.
T1: I see.Good!(称賛)



文章で答える質問

T1: I see. So, **What animal do you like?**
S: I like dogs.
T1: Ok.Nice.(称賛)

図 3 挙手・Yes/No で答える質問から
文章で答える質問へ

注：筆者作成

授業を実践する中で、児童が回答に詰まる場面もあった。そのような場合は、もう一度教師同士のやりとりを見せたり、求めている答えの例を伝えたりした。また、児童が日本語で回答した場面では、教師が正しい英語で伝えていった。

教師同士のやりとりについては、それまで以上に言語外情報であるジェスチャーを大きくゆっくり行った。また、答えの具体例を伝えて、質問の意味を理解させることを目指した(図 4)。

単元の後半では、新しい単元の中で学んだ新出事項を用いた質問を行った(図 5)。その際、新出事項は繰り返し聞かせることを心掛け、

教師同士のやりとり

T1: I see. So,What animal do you like?
S: . . .
T1: ~先生,What animal do you like?
T2: **I like turtles.**
(ジェスチャーを大きくゆっくり)

答えの例を伝える

T1: I see. So,What animal do you like?
S: . . .
T1: **Monkeys? Tigers? Elephants?**

図 4 子どもが回答に詰まった場面

注：筆者作成

既習事項を用いた質問(単元の前半)

T1: **What animal do you like?**
S: I like dogs.
T1: I see.Nice.(称賛)



新出事項を用いた質問(単元の後半)

T1: **Where do you want to go?**
(繰り返し)
S: I want to go to ~.
T1: I see.Good job.(称賛)

図 5 既習事項を用いた質問から
新出事項を用いた質問へ

注：筆者作成

何度も表現に触れる機会を設けた。また、授業の中で、継続的に言語外情報を用いたり、児童を称賛したりして、児童に英語を理解させることや不安感を減らすこと、自信を持たせることを目指した。

(4)称賛について

文部科学省(2017)は小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(実習編)において、クラスルームイングリッシュとして「ほめる」言葉、「励ます」言葉の表現をまとめている(文部科学省 2017,p.123)。

本実践では、上記の表現を参考にし、児童に対する称賛を継続的に行っていった。しかし、授業者の見取りから、児童の反応に対して称賛をしていない場面が多くみられた。そこで、文部科学省(2017)が示している表現を使いたい場面ごとで分けてまとめて、授業中に児童の反応に対して称賛する機会が増えることを目指した(表 4)。

表 4 クラスルームイングリッシュ(場面ごと)

「ほめる」言葉	
子どもが正しい表現で回答した場面	That's right! Good! Great! Good job! Excellent! Nice! Perfect! Thank you!
ゲームをした場面	Congratulations!
子どものつぶやいた場面	Good idea!
「励ます」言葉	
苦手意識の強い子どもが発言した場面	Nice try! Good try! That's good.
ゲームをした場面	Close!
子どもが発言途中で詰まってしまった場面	Don't worry. You can do it!

注：文部科学省(2017)p. 123 をもとに筆者作成

4. 効果の検証

メリアー・アプローチを用いた授業を実践していくことは、次の 3 点で効果があると考ええる。

(1) 児童の興味をひくことができる

授業においては、どのようなやりとりにおいても、まずは教師同士のやりとりを見せたい。うえで、教師と児童とのやりとりをした。例えば、8 時間目の授業では、授業の前半に教師同士、教師と児童の順で行きたい国のやりとりをした。授業後、授業のビデオを分析する中で、教師同士のやりとりにおいては、児童が HINT BOOK(13 か国の国ごとに「見られる物」「食べられる物」「買える物」が写真付きで載っているもの)を見ている様子はあまりなかった。しかし、教師と児童とのやりとりにおいては、多くの児童が HINT BOOK を片手にやりとりを聞く様子や、顔を上げてやりとりを聞いている様子が見受けられた。このことは、授業を実践した 2 クラスともに共通して見受けられた。以上のことから、特に教師と児童のやりとりが児童の興味をひいたと考える。

(2) 児童の理解を助けることができる

授業後、筆者が授業のビデオを分析する中で、教師がジェスチャーをする場面や、具体例を挙げる場面(図 4: 前のページに記載)などにおいては、「あ〜！」などといった反応や、教師のジェスチャーを真似て、同様の動きをする児童が見受けられた。既習事項の少ない小学生にとっては、ジェスチャーや具体的な例が、児童の理解を助けることにつながったと考えられる。

ある児童の 1 時間目の振り返りシートには、教師の話していることが分からないというような内容の記述(図 6 の下線部分: 次のページに記載)が見られた。そのような記述を受け、ALT と話し合い、言語外情報をより多く用い

●●先生(ALT)や内田先生の言っていることがあまりわからなかった。

T1: どんな時にわかりにくかった？

S: ゲームの説明で●●先生(ALT)と先生が2人で話している場面



内田先生や●●先生(ALT)の言っていることが分かった気がした。

T1: どんな時にわかりやすかった？

S: ジェスチャーとかのとき

図6 話の内容を理解できる

注：筆者作成

ていくことを再度確認した。その後、同じ児童の2時間目の振り返りシートには、教師の話していることが分かるといったような内容の文が書かれており、記述の変化が見られた。

2時間目の授業後、振り返りシートの記述内容について、インフォーマルな形でのインタビューを行った。児童には、1時間目の振り返りシートの記述について、「どんな時にわかりにくかった？」と尋ねた。その結果、「ゲームの説明で(ALT)先生と先生が2人で話しているとき」という回答があった。また、2時間目の振り返りシートの記述については、「どんな時にわかりやすかった？」と尋ねた。その結果、「ジェスチャーとかのとき」という回答があった。こうした児童の回答から、教師のジェスチャーが児童の理解を助けたと思われる。

児童の振り返りシートの中に、教師が授業の中で繰り返し用いてきた表現に対する記述の変化が見られた。具体的には、「アメリカの言い方が少し、むずかしかった。」から「少し、アメリカの言い方が分かった気がする。(笑)」や、「おすすめの言い方が言えなかった。」から「自分の行きたい国のおすすめる言い方が分かった。」という記述の変化である。この

ことから、繰り返し表現を聞かせていくことで、児童の理解を助けることにつながったと考える。

以上のことから、実物や視聴覚機材、ジェスチャーを用いていくこと、具体例を挙げていくこと、繰り返し英語の表現を聞かせていくことが、児童の理解を助けることにつながったと考える。

(3) 教師が授業で留意する視点を明確にすることができる

メリアー・アプローチを用いて授業を実践していく中で、授業で留意する視点を明確にしていくことができた実感している。本単元の5時間目に行った研究授業の後、参観していただいた先生からは、「英語に対する子どもたちにとってのハードルを下げる工夫をしている。(小学校教諭)」,「子どもたちにちゃんと聞いていて、Interactiveな授業をしている。段階的にやっている。(外国語教育コーディネーター)」というお言葉をいただいた。授業の改善点は多くあるが、メリアー・アプローチを用いて授業づくりをしていくことで、教師が授業で留意する視点を明確にすることができる。また、授業で留意してきたことが、児童にとってのハードルを下げることや、Interactiveな授業をしていくことにつながったと思われる。

5. まとめ

これまで、メリアー・アプローチの7つの視点をういた授業づくりについて2つの目標のもとで検討してきた。

2つの目標とは、第1に、教師が授業で英語を使う際に留意する視点を明確にできるようになることであり、第2に、教師が使う英語を児童が理解できることであった。

筆者は授業実践の過程で、メリアー・アプローチの7つの視点の中でも、特に⑤Interaction(やりとり)を中心として捉えることで、

7つの視点をイメージし易くなると感じた(モデル図)。ただし、⑤Interaction(やりとり)については、「やりとりをしないといけない」ではなく、教師自身の「聞いてみたい」という気持ちを大切にしたい。また、英語を使う際に、教師が知らないことについて問いかけていき、英語を使うことを目的としてではなく、手段として捉えていけるようにした。そのうえで、やりとりをする際に筆者が心掛けたことは以下の3点である。

- (1) まずは教師同士のやりとりをして、そのうえで教師と児童とのやりとりをしていくこと
- (2) 児童の発した日本語を教師が正しい英語で繰り返すことから、やりとりにつなげていくこと
- (3) 単元の前半では、既習事項を用いたやりとりをして、単元の後半では、新出事項を用いたやりとりをしていくこと

前述の3点に加え、やりとりに向けて活動間の指示をする際に③Redundancy(言い換え)を用いた。また、やりとりの中で児童に英語の意味や表現を理解させるために、②Example(具体例)・④Repetition(繰り返し)・⑥Expansion(正しく繰り返す)を必要に応じて用いた。①Mime/model(言語外情報)・⑦Reward(称賛)については、授業を通して継続的に用いることで、児童が英語の意味を理解していくことや児童の不安や自信のなさを減らしていくことを目指した。

その結果、メリアー・アプローチの7つの視点をを用いた授業を実践していくことが、以下の3点で効果があった。

- (1) 児童の興味をひくことができる
- (2) 児童の理解を助けることができる
- (3) 教師が授業で留意する視点を明確にすることができる

一方で、今回は実習校の諸先生方のご配慮もあり、ALTと打ち合わせの時間を取ることができていた。しかし、実際の学校現場においては、必ずしもALTと授業について打ち合わせをする時間を確保できるとは限らない。本研究を通して教師同士のやりとりの重要性を感じたからこそ、前述したALTと十分に打ち合わせができない場合にどうしていくかを考えていきたい。また、本実践においては、小学校5年生を対象としたが、発達段階や習熟度によってアプローチの違いはあるかについても検討していきたい。その際に、教師がそれぞれ児童の既習事項を把握することで、本研究の効果として挙げた「児童の理解を助けること」につなげていけると考える。

最後に、授業を実践する中で、強く印象に残っている場面がある。それは、全体の前で児童同士にやりとりをさせた時のことだ。やりとりをする児童はもちろん、クラスの全員がこれまで見たことのない表情で、とても楽しそうに授業に参加している様子が見てとれた。メリアー・アプローチを用いて教師が自信をもって授業を実践していくことで、これからの、児童同士が英語で伝え合う機会を増やしていきたい。

6. 引用文献

文部科学省(2014) 平成26年度「小学校外国語活動実施状況調査」の結果について http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afie/ldfile/2015/09/24/1362168_01.pdf (2018.11.16 閲覧).

文部科学省(2017) 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afie/ldfile/2017/07/07/1387503_3.pdf (2018.11.16 閲覧).

酒井英樹(2014)『小学校の外国語活動 基本の「き」』大修館書店.

渡邊時夫・酒井英樹・塩川春彦・浦野研(2003)『英語が使える日本人の育成』三省堂.